無罪放免

ボーモント・テキサス

福島　鏡

　ヒューストンからＩ－１０を東へ八十八マイル程行った所に、日本ではあまり知られていないが、今では大分県別府市と姉妹都市のボーモント市がある。ロスから最初にこの街へ来た時、ひどい田舎街に来たもんだと、街の古さと道の狭さ、松の木と樫の木に覆われ、草木の臭いが鼻をつくこの街にがっかりした。お世辞にも綺麗な街とは言えなかった。いや、ダウン・タウン南側の古い木造家屋の辺りの道路に散らばる紙くずや放置されたゴミを見ると、汚い街であった。
　この街に中華と鉄板焼の日本レストランが一軒あった。忙しいから早くきてくれ、と急かされて来て見ると真っ赤な嘘で、来る日も来る日も閑古鳥の鳴く店があった。台湾人三人の共同経営者と十五人の従業員がなすすべもなく、座して毎日客を待てども客は来なかった。このままの状態が続けば、辿る道は閉店、倒産だけだった。
　やがて、意を決したような深刻な顔をしたオーナーが俺の前に立っていた。
「頼む、トニー。助けてくれ」
彼らは深々と頭を下げた。この情況が改善されなければ、仕事がなくなる、給料が出なくなる。仕事を始めて二週間が過ぎる頃にはこの店の情況を飲み込んでいたが、ただシェフの身分ではどうすることもできなかった。俺はどんな仕事でも職場でも、よくするためには何でもできた。仕事も早いし、アイデアもある。しかし性格が素直過ぎ、一旦信じたら疑うことを知らないから、すぐに利用されてしまう。
　どう見てもこの店の経営情況は、切羽詰っていた。チーフ・シェフになり、シェフやウエートレス、バス・ボーイを雇用、解雇できる。俺が必要な協力は、全員で支える。オーナーとマネージャーの確約を取り、その職務遂行にあたった。
　それから半年。毎月一万ドルから二万ドル出ていた赤字が一万ドルから二万ドルの利益を叩き出す店に生まれ変わり、ボーモントでは、いや、ポート・アーサー市、オレンジ市を含むゴールデン・トライアングルと呼ばれる人口四十万人のこのエリアでは有名なレストランになっていた。
　俺は、ロスのベバリー・ヒルズにあるかの有名な鉄板焼レストランからこの店へやって来た。客を喜ばせるために、時々ムービー・スターを焼いた時のことを話したり、有名なカントリー・ウエスタン・歌手の誕生日貸切パーティーや丁度売れ出したコメディアンのことを話すと、客は俺のことをベバリー・ヒルズの有名人と同一に見るようになった。もちろん俺にはベバリー・ヒルズで十分通用するパフォーマンスと技量があったが。
　俺の名前は、このゴールデン・トライアングルでは店の名前以上に知れるようになってしまった。俺の名前を聞いた客はルイジアナ州のレイク・チャールス市からも来た。
　この店で二年間働くと、自分の店を作るためにイースト・テキサスのタイラー市へ引っ越した。そこで俺が舐めたものは失敗と友達の裏切りだった。人を信じる人間が馬鹿だと言われても、俺の性格は直らなかった。そして又店のオーナーの一人、ディビッドによりこの店に呼び戻された。
　一年半の空白を経てこの店に戻ってくると、新しい日本人のチーフ・シェフと年配の日本人シ

ェフがいた。その他にもベトナム人のシェフやバス・ボーイがいて賑やかになっていた。もう一軒新規に店を出すから、どうしても貴方が必要なんだ。ディビッドが俺に言った。

早速俺はディビッドと次の店舗の準備にはいるが、今回はシェフではなく、事業拡張計画責任者の一人であった。新しくこの店に来た年配のＡさんとチーフ・シェフはゴルフ狂で毎日ゴルフをやっていた。この辺りでは、日本では考えられない程の低料金でプレイができた。時間が許す限り、俺も誘われてゴルフよりも自分が打った球の玉探し、それに人が失くした玉拾いに加わった。

タイラーでの苦い一年半を払拭するように、いつも女房の口癖だったリンカーンかキャデラックに近いグランド・マーキスの新車を女房のために買った。俺と年配のＡさんは一緒に飲みに行くようになった。

ある夜。店の仕事が終わってから二人で新車のグランド・マーキスに乗る。俺にしてはすげぇーいい車だった。性能は別として、当時は日本車にはない豪華さがあった。ピカピカの室内とオートマティックの手軽さで店の裏手にある飲み屋へ向った。

もうこの頃に飲む自分の飲み物はカナディアン・ウイスキーのクラウン・ロイヤルと決めていた。飲み易くて二日酔いをしない。知る人ぞ知るこのウイスキーは日本人の間ではごくわずかな日本人しか知らなかった。以前、二日酔いしないからとバーボンを進められバーボンを口にしていたこともあるが、匂いも強く口当たりも癖があった。Ａさんはスコッチを飲んでいた。お互い水割りで三杯ぐらいを飲み干す。ダウン・タウンに此処よりも面白い所があるからと、Ａさんの提案で又車に乗った。

夜中だけど、フリー・ウエイにも街中のどの通りにも外灯がついていた。外は十分に明るく何の不自由もなくダウン・タウンの飲み屋近くまで来た時だった。Ａさんが、

「トニーさん。止まったほうがいいよ」

「どうしてですか。Ａさん・・」

「ポリス・カーがついてきてるよ」

バック・ミラーを見ると、確かに自分の後ろをポリス・カーがついてきていた。

「トニーさん。すぐ止まったほうがいい。ポリス・カーは一台だけじゃない。二台だよ」

Ａさんに言われ、車を路肩に止めるが、どうして自分の車をつけてくるのか、納得できなかった。

「どうしてですかね・・」

一瞬沈黙したＡさんに、

「あっ・・。トニーさん、ヘッド・ライトを点けていないでしょう」

言われて確認すると、確かにヘッド・ライトが点いていなかった。もうどんな言い訳も通用しない。居直りと不貞腐れしかなかった。

ドライバー席のウィンドウを開け、財布から運転免許証を取り出して、ポリスがウィンドウへ来るまで待つ。運転免許証を取り上げたポリスが免許証を見ながら、顔、名前、住所を確認した。

「どうして、ヘッド・ライトを消して運転しているのだ」

「外が明る過ぎて、ヘッド・ライトが点いているものとばかり思ってた」
「外へ出ろ。真っ直ぐ歩いてみろ」
アルコールに強い俺は、何の問題もなく真っ直ぐに歩いた。ポリスの尋問が続く。
「お前は何人だ」
「俺はジャパニーズだ」
「ここで何をしている」
「日本のレストランでシェフをやっている」

「店の名前は何だ」
「古都・オブ・ジャパンだ」
「うむ・・・・・。まさか、お前はトニーではないか」
「そうだ。俺は、トニーだ」
俺の名前をトニーと確認したポリスは運転免許証を持ったまま二台目のポリス・カーへ行った。
しばらく二台目のポリス・カーのポリスと話していたポリスが戻ってきた。
「トニー。今日は何もなしだ。しかし、今度止めたら絶対に捕まえるぞ。いいな」
「もちろんだ。わかっている。有難う」
警告用のライトを消したポリス・カーはすぐに走り去った。
　「信じられないよ、トニーさん。無罪放免だ。まさか、こんなことが起こるとは・・・」
助手席に座っていたAさんはすーと胸を撫で下ろした。
「俺も捕まるとばかり思っていましたよ。だってアルコールは飲んでるし、ヘッド・ライトを点けてなかったし・・」
俺にとってボーモントは幸運な街であったに違いない。人によっては幸運な時期や不運な時期がある。良くも悪くもこの時期の古都・オブ・ジャパンのトニーと言えば、その名はこの辺りでは知れ渡っていた。